日本中東学会ニューズレター

JAMES
NEWSLETTER

No.167
2022/7/31

目　　次

理事会報告.....1
総会報告.....2
日本中東学会第38回年次大会報告.....12
『日本中東学会（AJAMES）』編集委員会報告.....27
『日本中東学会（AJAMES）』バックナンバーの無償配布について.....28
寄贈図書.....28
会員の異動.....29
連絡先をご存じないですか.....29
日本中東学会メーリングリストの利用についてお願い.....29
事務局より.....30

理事会報告

【メール審議（2022年4月29日～2022年7月31日）】

1.　学会員名簿の研究目的での使用に関して

4月25日の第1回理事会で審議継続となっていた学会員名簿の研究目的での使用に関して、「デジタルヒューマニティーズ的手法によるコネクティビティ分析」（2019～2024年度、学術変革領域研究(A)「イスラーム的コネクティビティにみる信頼構築：世界の分断をのりこえる戦略知の創造（イスラーム信頼学）」所属）からの利用申請を

メールで稟議し、5 月 1 日に利用許可を承認した。

2.　2022 年 5 月 1 日　日本での AFMA の開催年度に関して
　コロナ禍で順延となっていた 2022 年度の日本での Asian Federation of Middle East Studies Associations（AFMA）の開催に関して、これまで偶数年で開催がなされていたこと、および 1 年延期し 2023 年度に開催する場合、World Congress for Middle Eastern Studies （WOCMES）の開催年度と重なることを踏まえて 2024 年度を開催年度とし、必要な予算措置を施すことをメールにて稟議し、5 月 5 日にこれを承認した。

3.　2022 年 5 月 12 日　新規入会申し込みについて
　6 名から新規入会希望があり、メールでの稟議の結果、5 月 14 日にこれを承認した。

4.　2022 年 6 月 8 日　新規入会申し込みについて
　3 名から新規入会希望があり、メールでの稟議の結果、6 月 10 日にこれを承認した。

5.　2022 年 7 月 4 日　新規入会申し込みについて
　2 名から新規入会希望があり、メールでの稟議の結果、7 月 6 日にこれを承認した。

（青山弘之　ニューズレター・書記担当理事）

総会報告

【2022 年度日本中東学会第 38 回年次大会総会議事録】
日時：2022 年 5 月 14 日（土）13:00-14:00
会場：オンライン（Zoom ウェビナー特設会場）
出席：当日出席者 46 名、委任状提出 120 名、計 166 名
（会員総数 644 名に対する総会定足数 5 分の 1（130 名）を満たしたことにより、総会成立）

1.　開式宣言

2.　司会及び総会役員の選出
　鷹木恵子会員の司会により、議長として吉川卓郎会員、書記として沖祐太郎会員、村山木乃実会員が、議事録署名人として金城美幸、溝渕正季両会員が選出された。

3.　2021 年度事業報告および決算
　下記の通り、2021 年度事業報告、AJAMES 編集委員会活動報告、2021 年度決算報告、監査報告が行われ、質疑応答を経て全会一致で承認された。

3-1. 事業報告（報告：堀抜功二　第 19 期事務局長）

1) 学会事務局を高崎経済大学から日本エネルギー経済研究所中東研究センターへ移転した。
2) 第 37 回年次大会（立命館大学）を 2021 年 5 月 15 日～16 日にオンラインで開催した。公開講演会「危機に対応する中東地域研究：9.11 事件から 20 年、『アラブの春』から 10 年、コロナ危機から 1 年」を開催。研究発表 6 部会 35 本、企画セッション 1 本。
3) 日本中東学会年報（AJAMES） 第 37-1 号 2021 年 9 月、第 37-2 号 2022 年 3 月の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行った。海外研究機関他、国内外寄贈先への発送を行った。科学技術振興機構の運営科学技術情報発信・流通総合システム（J-stage）においてバックナンバーの公開（第 36 巻 2 号まで）を行った。AJAMES バックナンバーの整理を行った。
4) 第 28 回公開講演会「中東の都市探訪：歴史と文学から」を 2021 年 11 月 13 日にオンラインで開催した。
5) ニューズレター和文 4 回（総頁 63 頁）を発行した。第 162 号（4 月 28 日、10 頁）、第 163 号（7 月 31 日、年次大会特集、29 頁）、第 164 号（12 月 12 日、11 頁）、第 165 号 3 月 31 日、13 頁）。
6) 「日本における中東・イスラーム研究文献データベース 1989-2021」につき、新規業績などの調査・更新 を継続し、学会ウェブサイトにおいて公開した。
7) 学会ウェブサイト、学会公式ツイッター、および会員メーリングリストによる広報を行った。
8) 海外の関連学会との交流を促進した。第 37 回年次大会で韓国中東学会 Dr. Yu Dal Seung 会長にご挨拶を頂いた（オンライン）。KAMES AFMA International Conference 10 月 15・16 日）で保坂修司会長より来賓挨拶を行った（オンライン）。
9) 地域研究学会連絡協議会の参加組織として相互交流に努め、地域研究の興隆を図った。
10) 日本学術会議協力学術研究団体として、他団体と連絡を取りつつ必要な活動を行った。
11) 会員の増減：入会者 39、退会 30 名（自主退会 10 名／強制退会 20 名）の異動があった。その結果、2022 年 3 月 31 日現在の会員数は 644 名（正会員 478 名／うち海外在住 12 名：会費特例会員 25 名；学生会員 141 名／うち海外在住 2 名）となった。

3-2. AJAMES 編集委員会活動報告（報告：錦田愛子　第 19 期編集委員長）

1) 37-1 号の編集・刊行（2021 年 9 月に発送）。17 本（うち日本語 13、英語 3（英語博論要旨 2 本を含む）の投稿を受け付け、そのうち原稿7本（論文 3（日本語）、研究ノート 1（日本語）、資料紹介 1（日本語））を掲載した。また英語博論要旨を 2 本掲載した。
2) 37-2 号の編集・刊行（2022 年 3 月に発送）：17 本（うち日本語 10、英語 3、仏語

4（特集））を受け付けた。そのうち、7 本（論文 3（日本語 2、英語 1）、特集 4（仏語：論文 4）を掲載した。

3) 平成 31 年度科研費（研究成果公開促進費交付申請、執行を行った国際情報発信強化）「アジアにおける中東研究のリーディングジャーナルとしての『日本中東学会年報』の国際情報発信強化」（金額 250 万円／年）の交付を受け、AJAMES 出版のために執行した（2021 年度が最終年度）。

4) 令和 4（2022）年度科研費（研究成果公開促進費 ・国際情報発信強化（B））「中東研究のグローバル連携強化と国際情報発信の取組」令和 8（2026 年度）まで（金額 260 万円／年）に応募するも不採択となった。経費の妥当性について十分に説明し、再度応募する予定。

5) その他 : J-STAGE（オープンアクセス）にバックナンバー（36-1、36-2 号）を公開した。

3-3. 決算報告（報告：堀拔功二　第 19 期事務局長）

- 総収入は 28,795,039 円（内訳　前年度繰越金が 20,866,273 円、年会費収入が 5,150,000 円、その他収入（AJAMES 販売代金などを含む）2,778,766 円）であった。
- 総支出は 28,795,039 円（内訳　事務局費 1,476,104 円、事業費 3,907,270 円、2022 年度への繰越金 23,411,665 円）であった。
- その他、年次大会時託児所特別基金、学会奨励賞特別基金、年次大会特別基金の収支についても報告があった。
- 総会の決議を経て学生会員、会費特例会員の 2021 年度会費の免除を行った。なお、2021 年度会費をすでに納入した対象会員は、返金要求のあったものを除き 2022 年度会費へと振替えた。
- 事務局費「アルバイト謝金」の決算が予定より低かった。これは、事務局でアルバイトを恒常的に雇用しなかったためである。
- 事務局費「資料保管費」で決算が予算額を上回った。これは AJAMES 保管用倉庫（プライベートボックス）の整理を実施したためである。
- 事業費「データベース改修費」の決算が 0 になっている。これは、予定していた事業が計画通りに実施できず、支出が発生しなかったためである。
- 事業費「国際交流費」の決算が 0 になっている。これは、コロナ禍で国際交流事業が実施できず、支出が発生しなかったためである。
- 事業費「AJAMES 印刷製本費」と「AJAMES 国内発送費」の支出で 10 万円以上の増減があった。これは 2020 年度に費目の見直しを行い、従来は前者に含まれていた費用の一部（シャムス社発送業務費）を後者に変更したためである。そのため、支出の実質的な増減はない。
- 事業費「中東・イスラーム文献 DB 更新費」の決算が 0 になっている。これは、2022 年 3 月末までに謝金支払いが完了しなかったためである。そのため、2022 年度予算に、本来 2021 年中に支払うべきであった謝金分を上乗せして計上する。

3-4. 監査報告（報告：辻上 奈美江　第 19 期監事）

- 2022 年 4 月 19 日に、オンラインにて 2020 年度の会計監査を行った結果、適正に処理されたことを確認した。

＜質疑応答＞

（質問 1）スピーカーのみが画面表示されるという方式は、他にどのような会員が総会に参加しているかわからず、対面の総会方式に比べて議論を成立させにくいたいへんに特殊な方式と思われるが、このような形式を取った理由は何か。

（回答）（堀拔功二事務局長）昨年を踏襲し、会議管理の観点からこのような形式を使用した。仮に 600 人以上の出席があった場合、カメラやマイクの消し忘れなどの混乱があると懸念されたためである。開催形式の妥当性については、次回の大会運営に引き継ぎを行う。

（質問 2）英文ニューズレターは編集・刊行していないのか

（回答）（保坂修司会長）本日、担当の理事が欠席している。理事会で検討し、後ほどニューズレターで全会員に対し決定事項を知らせる。

（質問 3）2021 年度の会費の納付率はどの程度か。会員負担の公平性の観点から、未納者に対する督促も必要かと思うが、どうしているのか。

（回答）（堀拔事務局長）資料の⑩にある通り、昨年度の納付率は 90％である。一昨年に事業委託をおこなったが、以降納入の状況が良くなっている。督促も行っている。

（質問 4）AJAMES の投稿数に対し、査読が通るのは 4 割になる。通らなかった論文はどうしているのか。査読が通らなかった論文も、続けて審査を続ければ、採択率があがるのではないか。

（回答）（錦田愛子編集委員長）査読判定 C や D になった論文についても、今後加筆修正して投稿するように投稿者に促している。実際に、書き直し投稿している例もある。

（質問 5）今後の海外の編集委員には、誰にどのような役割を期待して依頼するのか。また AJAMES の今後の在庫管理はどのように考えているのか。

（回答）（錦田編集委員長）海外の編集委員については、現在適任者を決めかねている。次の方が決まった段階で、現在の海外編集委員には連絡を入れる。科研費の研究成果促進費で、海外の編集委員がどの程度査読に関わっているのかを書く欄がある。現在は「0」と書かざるを得ない状況のため、今回科研費が不採択になった可能性が高い。AJAMES は査読期間が短いため、編集委員の依頼がしづらい。また、査読者の会費を免除しようかと検討している。在庫については、毎号 20 冊程度保管していた。永久保存版＋追加数冊を保管に回し、その上で、会員に配布あるいは処分を検討している。

（質問 6）オンライン・ウェビナー形式での総会開催だと、一般参加者はホストが許可を与えないと発言できない。また、日本中東学会は公益社団法人ではないものの、オンライン・ウェビナー形式での開催は内閣府が公益社団法人に対して示している指針にかなわないのではないか。
（回答）（堀拔事務局長）早急に確認し、来年度の学会に引き継ぐ。

（質問 7）今回はアルバイト謝金の金額が低いが、これは事務局の置かれている日本エネルギー経済研究所の方々の手弁当の結果なのではないか。今後のアルバイト謝金も今回と同じく 50 万で計上しているが、過去の決算案をみていると 90～100 万が妥当なのではないか。
（回答）（堀拔事務局長）今回は日本エネルギー経済研究所中東研究センターに所属している会員の手弁当によるところが大きいが、これが恒常的だとは思わない。事務局が移転し、アルバイトを雇う必要が生ずると変動する可能性がある。

（質問 8）広報委員会事業費について 50 万円を計上されているが、この内訳は何か。
（回答）（秋葉淳広報担当理事）内訳は主にホームページ等の管理を委託している業者への人件費である。メーリングリストの管理等も含まれている。

4. 学生会員および会員特例会員の 2022 年度会費の免除について（報告：保坂修司 第 19 期会長）

新型コロナウイルス感染拡大が続くなか、大学院生や非常勤講師の経済的窮状が引き続き問題となっているため、2020 年度および 2021 年度に引き続き、学生員および会費特例措置の適用を受けている正会員に対する会費免除が下記の通り提案され、全会一致で承認された。

- 2022 年度会費を一律免除する。
- 2022 年度会費をすでに払った対象会員は、それを 2023 年度（以降）会費へ振り替える。希望もあれば返金の手続きを行うが、できる限り振替とする。

5. 2022 年度事業計画および予算

下記の通り、2022 年度事業計画、AJAMES 編集員活動計画、予算案が報告され、質疑応答を経て全会一致で承認された。

5-1. 事業計画（報告：堀拔功二　第 19 期事務局長）

1) 第 38 回年次大会を 2022 年 5 月 14 日～15 日に早稲田大学（ハイフレックス）において開催する。
2) 日本中東学会年報（AJAMES）第 38-1 号（2022 年 7 月）、第 38-2 号（2022 年 1 月）の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行う。また外国人編集委員の交代による審査・編集体制の強化 、原稿執筆要領・内規・検討票の改訂、投稿規程の改訂などにも取り組む。

3) AJAMES バックナンバーの過剰在庫を整理する。本学会員を対象に整理対象リストを一定期間公開し、希望者に対して無償で譲渡する。なお、譲渡にかかる費用や残ったバックナンバーの処分費用については、学会予算から支出する。
4) 第 29 回公開講演会を 2022 年 11 月頃にオンラインまたはハイブリッド形式で開催する。
5) ニューズレターを年数回発行する。
6) 学会ウェブサイトの 中東研究文献データベースの改修を行う。
7) 「日本における中東・イスラーム研究文献データベース 1989-2022」につき、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ウェブサイトにおいて公開する。
8) 学会ウェブサイト、学会公式ツイッター、および会員メーリングリストによる広報を行う。
9) 海外の関連学会との交流を促進する。またアジア中東学会連合（AFMA）の 2024 年大会の日本開催に向けた準備を進める。
10) 地域研究学会連絡協議会の参加組織として相互交流に努め、地域研究の興隆を図る。
11) 日本学術会議協力学術研究団体として、他団体と連絡を取りつつ必要な活動を行う。
12) 第 20 期評議員・理事選挙を行う。

5-2. 2022 年度 AJAMES 編集委員会活動計画（報告 : 錦田愛子　第 20 期 AJAMES 編集委員長）

1) 38-1 号の編集・刊行 : 19 本（うち日本語 12、英語 7）の論文投稿を受け付け、そのうち 8 本（論文 5（日本語）、英語博論要旨 3）を掲載する。現在編集作業中で、2022 年 7 月に発送予定である。
2) 38-2 号の編集・刊行 : 2022 年 6 月 1 日に投稿締切、6 月 2 日から審査作業、2023 年 1 月刊行予定。
3) 2022 年度編集体制 : 編集委員長 : 錦田愛子、副編集委員長 : 横田貴之、福田義昭、編集委員 : 斎藤剛、石黒大岳、佐々木紳、山﨑和美、吉岡明子、吉村武典、菊地達也、江﨑智絵、柏木健一、今井宏平、D.F. Eickelman、R. S. Humphreys、A. K. Rafeq、Kim Joong-Kwan、Song Kyung-Keun
4) 令和 5 年度（2023 年度）科研費 研究 成果公開促進費（国際情報発信強化）の申請
5) その他
   - 外国人編集委員の交代による審査・編集体制の強化（国際情報発信強化）
   - J-STAGE でのバックナンバーの公開作業（37-1 号以降）
   - 原稿執筆要領・内規・検討票の改訂
   - 投稿規程の改訂（著作権、プレプリント原稿投稿への対応について記載）

5-3. 日本中東学会 2022 年度予算報告（報告 : 堀抜功二　第 19 期事務局長）

- 総収入は 28,701,994 円（内訳　前年度繰越金 23,411,665 円、年会費収入 5,040,250 円、その他の収入（AJAMES 販売代金を含む）250,079 円）を予定している。
- その他の収入の科研費国際情報発信強化助成について、2022 年（令和 4 年）度は不採択となり、約 250 万円の減収となる。
- 総支出は 28,701,994 円（内訳　事務局費 1,750,000 円、事業費 6,175,133 円、2023 年度への繰越金 20,776,861 円）。
- その他、年次大会託児所特別基金、学会奨励賞特別基金、年次大会特別基金について、それぞれ例年並みの予算を計上している。
- 今年度もコロナ禍による会議のオンライン化が継続するものと考え、理事会開催に必要な会議費や交通費、編集委員会旅費、国際発信強化旅費などを削減した。
- 事務局費「資料保管費」について、過去の事務局資料の整理を予定しており増額した。
- 事業費「AJAMES 欧文校閲費」は前年度の実績に合わせて減額した。
- 事業費「広報委員 会事業費」はホームページ管理の業務委託により前年比 400,000 円増の 900,000 万円とした。
- 事業費「AJAMES 国内発送費」は前年度の実績に合わせて増額した。
- 事業費「AJAMES 在庫整理費」を新たに 200,000 円計上した。
- 事業費「選挙費用」は、第 20 期評議員・理事選挙に関する費用として 300 ,000 円を計上した。
- 事業費「公開講演会開催費」はハイブリッド形式での 開催の可能性もあるため増額した。
- 事業費「中東・イスラーム文献 DB 更新費」は、本来前年度に支払うべき謝金の支出が完了しなかったため、前年分の費用を盛り込んだ。
- 前年度に実施できなかった 学会ホームページ「中東研究文献データベース」の改修費として、400,000 円を再度計上する。
- 2021 年度科研費残額の 170,133 円を返金する。

＜質疑応答＞

（質問 1）広報委員会事業費という名前は分かりにくいのではないか。内容がより分かりやすい名称に変更した方がよいのではないか。

（回答）（秋葉広報担当理事）本事業は必ずしもホームページの管理のみではない。現在の広報委員会事業費の大半は時間給でのアルバイト支払いであるが、大学院生の頃から雇っている担当者が独立し会社を起こし、より広範な業務を委託できることとなったため、今後は業務委託として支出を予定している。WEB 管理だけでなく、SNS 上での広報等も一部委託で行っている。

（回答）（堀抜事務局長）実際の支出の内容がわかりにくいため検討する。現在は、中東学会の広報にかかわる費用をまとめて計上している。

（回答）（保坂会長）補足になるが、現在の広報担当理事は、かつて HP 担当理事と呼ばれていた。保坂が理事就任後 HP のみならず幅広く広報を行おうと試みたため、

HP 担当から広報担当になった経緯がある。

（質問 2）22 年度予算について、単年度で見ると収入より支出が多く約 260 万の赤字となっている。おそらく AJAMES 国際発信助成がないのが理由だと思われるが、2022 年度会費予算 2022 年度分 455 万は、学生会員等の免除 80 万を除いた額か。
（回答）（堀抜事務局長）予算案については、学生会費および会費特例会員の会費免除による減額を見越したものを出している。

（質問 3）ホームページ委託費に関して、こちらはサイトの保守管理費のみか。またはコンテンツの記入など人件費も含むものか。
（回答）（秋葉広報担当理事）委託費には、保守管理のみならずコンテンツ管理も含まれる。そのほか、メール配信の代行、ツイッターの代行、技術的なコンサル費も含まれている。

（質問 4）AFMA の開催が 2024 年になった経緯は何か。
（回答：岩崎えり奈理事）AFMA の前回の開催国は韓国であり、本来ならば今年日本で開催予定だった。しかし昨年、一年遅れて韓国で開催された。そのため、通常は来年になるが、次の 2 点を考慮して 2024 年開催にした：①来年度開催予定の WOCMES と重ならないようにするため、②AFMA は偶数年に行われてきたため、ここで偶数年戻すことを考えたため。

6. 日本中東学会挨拶（保坂修司会長）

7. 韓国中東学会会長挨拶（Dr. Mijung Hong 会長）

8. 議事終了・開式宣言
議事会終了につき、司会の鷹木恵子会員から閉会が宣言された。

2021年度決算案

本会計

収入	21年度予算	21年度決算
2020年度よりの繰越金	**20,866,273**	**20,866,273**
年会費	**4,278,395**	**5,150,000**
正・学生会員	4,278,395	5,150,000
2018年度以前分	115,625	85,000
2019年度分	209,250	215,000
2020年度分	419,520	400,000
2021年度分	3,534,000	4,180,000
2022年度以降分	-	270,000
賛助会員	0	0
その他	**2,750,063**	**2,778,766**
科研費公開講演会助成金	0	0
科研費国際情報発信強化助成	2,500,000	2,500,000
利子	63	79
AJAMES販売代金	250,000	258,522
AJAMES掲載料	0	20,000
寄付	0	0
錯誤振込	0	0
雑収入	0	165
収入合計	**27,894,731**	**28,795,039**

(単位：円)

支出	21年度予算	21年度決算
事務局費	**1,700,000**	**1,476,104**
アルバイト謝金	500,000	299,922
通信費	80,000	77,030
消耗品	50,000	8,133
会議費	0	0
交通費	0	0
振込手数料	20,000	13,640
事務局備品費	0	0
事務局移転費	50,000	36,000
事務局業務外部委託導入費		
事務外注費	900,000	887,921
資料保管費	100,000	148,458
会費返金	-	5,000
事業費	**5,261,097**	**3,907,270**
大会開催費	400,000	400,000
大会会場費	0	0
AJAMES編集費	300,000	247,500
AJAMES欧文校閲費	300,000	29,706
AJAMES印刷製本費	2,100,000	1,833,788
編集委員会旅費	0	0
ウェブサイト改修費	0	0
データベース改修費	400,000	0
広報委員会事業費	500,000	567,020
国際発信強化旅費（海外招聘）	0	0
国際発信強化旅費（海外派遣）	0	0
国際交流費	200,000	0
AJAMES国内発送費	150,000	263,249
AJAMES海外発送費	100,000	87,650
選挙費用	-	0
J-Stage公開費	200,000	178,860
公開講演会開催費	150,000	43,400
中東・イスラーム文献DB更新費	150,000	0
地域研究学会連絡協議会分担金	0	0
人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会	10,000	5,000
年次大会特別基金への繰り入れ	50,000	50,000
託児所特別基金への繰り入れ	50,000	50,000
2020年度科研費残額返納	151,097	151,097
諸雑費	50,000	0
支出合計	**6,961,097**	**5,383,374**
繰越金	**20,933,634**	**23,411,665**
総計	**27,894,731**	**28,795,039**

(単位：円)

2022年度への繰越金内訳	**23,411,665**
郵便振替口座	12,785,986
三井住友銀行口座	10,431,751
科研口座	170,133
現金	23,795

(単位：円)

年次大会時託児所特別基金

費目	収入	支出
2020年度よりの繰越金	526,782	
本会計より繰り入れ	50,000	
利子	3	
第37回大会託児所運営費		23,160
振込手数料		550
2022年度への繰越金		553,075
合計	**576,785**	**576,785**

(単位：円)

学会奨励賞特別基金

費目	収入	支出
2020年度よりの繰越金 （片倉もとこ研究奨励基金を含む）	1,703,679	
奨励金		0
振込手数料		0
利子	118	
2022年度への繰越金		1,703,797
合計	**1,703,797**	**1,703,797**

(単位：円)

年次大会特別基金

費目	収入	支出
2020年度よりの繰越金	994,941	
本会計よりの繰り入れ	50,000	
利子	8	
第37回年次大会補填金		67,974
振込手数料		440
2022年度への繰越金	0	976,535
合計	**1,044,949**	**1,044,949**

(単位：円)

2022年度予算案

本会計

収入	21年度予算	22年度予算
2020年度よりの繰越金	**20,866,273**	
2021年度よりの繰越金		**23,411,665**
年会費	**4,278,395**	**5,040,250**
正・学生会員	4,278,395	5,040,250
2019年度以前分	324,875	79,050
2020年度分	419,520	102,000
2021年度分	3,534,000	308,700
2022年度分	-	4,550,500
賛助会員	0	0
その他	**2,750,063**	**250,079**
科研費公開講演会助成金	0	0
科研費国際情報発信強化助成	2,500,000	0
利子	63	79
AJAMES販売代金	250,000	250,000
AJAMES掲載料	0	0
寄付	0	0
収入合計	**27,894,731**	**28,701,994**

（単位：円）

（参考）各年度正・学生会員会費未納額／納入予定額および納付率

年度	未納額（円）/納入予定額（円）	前年度（2021年度）納付率
2018年度以前分		46%
2019年度分	155,000	46%
2020年度分	200,000	58%
2021年度分	490,000	90%
2022年度分	4,790,000	
合計	5,635,000	

上の表の見方は以下の通り
未納額：本年度予算策定時点で在籍している会員の会費未納額
前年度納付率：予算策定年度の前年度決算（たとえば2022年度予算であれば2021年度）における会費納付額÷前年度予算に書かれている未納額×100
＊2022年度予算に書かれている各年度（2019～2022年度）の年会費収入予算は、各年度分の会費未納額（上記）に、その前年度分会費の2021年度における納付率（＝2021年度決算における会費納付額÷2021年度予算に書かれている未納額）に5を足した値の1/100を掛けることによって算出している

支出	21年度予算	22年度予算
事務局費	**1,700,000**	**1,750,000**
アルバイト謝金	500,000	500,000
通信費	80,000	80,000
消耗品費	50,000	50,000
会議費	0	0
交通費	0	0
振込手数料	20,000	20,000
事務局備品費	0	0
事務局移転費	50,000	0
事務外注費	900,000	900,000
資料保管費	100,000	200,000
事業費	**5,261,097**	**6,175,133**
大会開催費	400,000	400,000
大会会場費	0	0
AJAMES編集費	300,000	300,000
同欧文校閲費	300,000	150,000
同印刷製本費	2,100,000	1,950,000
編集委員会旅費	0	0
ウェブサイト改修費	0	0
データベース改修費	400,000	400,000
広報委員会事業費	500,000	900,000
国際発信強化旅費（海外招聘）	0	0
国際発信強化旅費（海外派遣）	0	0
国際交流費	200,000	50,000
AJAMES国内発送費	150,000	300,000
AJAMES海外発送費	100,000	100,000
AJAMES在庫整理費		200,000
選挙費用	-	300,000
J-Stage公開費	200,000	200,000
公開講演会開催費	150,000	300,000
中東・イスラーム文献DB更新費	150,000	300,000
地域研究学会連絡協議会分担金	0	0
人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会分担金	10,000	5,000
年次大会特別基金への繰り入れ	50,000	50,000
託児所特別基金への繰り入れ	50,000	50,000
前年度科研費残額返納	151,097	170,133
諸雑費	50,000	50,000
支出合計	**6,961,097**	**7,925,133**
2022年度への繰越金	**20,933,634**	
2023年度への繰越金		**20,776,861**
総計	**27,894,731**	**28,701,994**

（単位：円）

年次大会時託児所特別基金

費目	収入	支出
2021年度よりの繰越金	553,075	
本会計より繰り入れ	50,000	
利子	3	
第37回大会託児費用補助金		200,000
2023年度への繰越金		403,078
合計	**603,078**	**603,078**

（単位：円）

学会奨励賞特別基金

費目	収入	支出
2021年度よりの繰越金（片倉もとこ研究奨励基金を含む）	1,703,797	
利子	118	
奨励金（片倉基金より）		0
振込手数料		0
2023年度への繰越金		1,703,915
合計	**1,703,915**	**1,703,915**

（単位：円）

年次大会特別基金

費目	収入	支出
2021年度よりの繰越金	976,535	
本会計よりの繰り入れ	50,000	
利子	8	
第38回年次大会補填金		
2023年度への繰越金		1,026,543
合計	**1,026,543**	**1,026,543**

（単位：円）

（堀拔功二　事務局長）

日本中東学会第 38 回年次大会報告

【プログラム】

第 1 日：2021 年 5 月 14 日（土）
公開講演会（英語／日本語同時通訳付・オンライン形式）
The Middle East…and beyond: Writing In/Outside the Middle East (A Dialogue with Amin Maalouf)／『中東を越えて：中東の内／外で書く』（アミン・マアルーフ氏との対話）
対話者：アミン・マアルーフ（作家）、小野正嗣（作家・早稲田大学）、大稔哲也（モデレーター・早稲田大学）
コメント：岡真理（京都大学）、黒木英充（東京外国語大学 AA 研）
挨拶：アレックス・マレット（早稲田大学カタール・チェア）

第 2 日：2022 年 5 月 15 日（日）
会場：早稲田大学戸山キャンパス 32 号館　※ハイフレックス（対面と Zoom の併用）
企画セッション（2 セッション）・個人研究発表（7 部会）

【企画セッション】
“Gender, social change, and politics in the Arab states of the Gulf”
Panel Chair: Abdullah Baabood (Waseda University)
Speakers:
Namie Tsujigami (Sophia University), “Do Consumption and Entrepreneurship Change Gender Order in Saudi Arabia?”
Manami Goto (JSPS; New York University Abu Dhabi), “Social Changes on the Abaya: The Study of Qatari Women”
Woohyang (Chloe) Sim (Waseda University), “The Reversal of the Gender Gap in Qatari Higher Education”
Respondent and Panel Organizer: Matthew Gray (Waseda University)

「社会変容と儀礼の再構成：現代イランの追悼儀礼から」
司会：椿原敦子（龍谷大学）
発表者：
黒田賢治（国立民族学博物館）「追悼儀礼へのビジュアル・アプローチへの可能性：『フレイムのなかの事件』を手がかりに」
谷憲一（上智大学）「国家および宗教権威による儀礼の包摂と排除：現代イランの事例から」
椿原敦子（龍谷大学）「フィクションとしての追悼儀礼」
コメンテーター：山岸智子（明治大学）

【個人研究発表】

第 1 部会（オンラインのみ）

Nicholas Mangialardi (Williams College), '"A Warm Eastern Sound": Listening to Arab Travelers in Modern Japan'

Dana Alnafouri (University of Tsukuba, J), "Wall paintings from ancient Syria"

兼定愛（同志社大学）「クルアーンに見る悲しみへの対応：「ラー・タフザン」という章句についての伝統的スンナ派啓典解釈書の分析を通して」

アルモーメン・アブドーラ（東海大学）「宗教言語と翻訳ストラテジーに見る意味等価とその妥当性：クルアーンの「雌牛章（アル＝バカラ）」を参照して」

竹田敏之（立命館大学）「現代アラブ詩における韻律学の伝統と革新」

榮谷温子（慶應義塾大学）「アラビア語文法学における「種（jins）」の概念と「一般」の用語の関連」

村上武則（東京外国語大学）「クルド文学史の文学史」

第 2 部会（オンラインのみ）

井堂有子（日本国際問題研究所）「エジプトの小麦政策とスーダンのゲズィーラ灌漑計画：ナショナルな食の安全保障をめぐるナイル渓谷の攻防」

柳沢崇文（日本エネルギー経済研究所）「脱炭素化の潮流と湾岸協力理事会（GCC）諸国の動向」

ハディ　ハーニ（東京理科大学）「アブラハム合意における権力と抑圧：批判的ディスコース分析の観点から」

岡野内正（法政大学）「トルコからのジェンダー難民によるイスラーム社会で最初の武装ジェンダー革命としてのロジャヴァ革命」

Keiko Sakai (Chiba University), "How Do Geo-Historical Factors Affect Political Preference: The Case of Baghdad Constituency in Iraqi Parliamentary Election in 2021"

小林周（学会員）「2021 年リビア国政選挙の分析：なぜ選挙は計画され、延期されたのか」

第 3 部会（オンラインのみ）

松田和憲（京都大学）「パキスタンにおけるラッバイク運動の結成と冒涜法」

倉洸（京都大学）「アゼルバイジャンにおける国家による宗教管理の行方：2021 年「信教の自由法」の改正を巡って」

黒田彩加（立命館大学）「「シャリーアと国家」をめぐる現代思潮とイスラーム改革：ハーリド・アブルファドルの政治思想の分析から」

桐原翠（日本学術振興会）「現代イスラーム世界におけるハラール：イスラーム法学派による食事規定とハラール食品の取り扱い」

足立真理（日本学術振興会）「現代インドネシアにおけるザカートの再構築：イスラームにおける制度化、デジタル化、新自由主義による影響をめぐって」

小島宏（早稲田大学）「英国のムスリム若者における宗教関連行動と健康」

第4部会（オンラインのみ）

望月葵（立命館大学）「欧州の移民・難民コミュニティの存立基盤とシリア難民問題」

鈴木慶孝（日本学術振興会）「トルコにおける移民・難民の地位と権利に関する一考察：条件付き難民を中心として」

Ziad Alahmad (Tokyo University of Foreign Studies), "Temporary Protection as a Temporary Solution: How Syrians See Turkey's Protection System after a Decade of Displacement"

熊倉和歌子（東京外国語大学）「マムルーク朝時代エジプトのアラブ部族と灌漑の維持管理」

小澤一郎（立命館大学）「19・20 世紀転換期のマクラーンにおける交易・交流：バルーチ人社会とアフガン人の武器交易活動」

篠田知暁（東京外国語大学）「15～16 世紀グマーラ山地の知識人ネットワーク形成」

第5部会（ハイフレックス：対面とオンライン）

Yuki Sawaguchi (University of Tokyo, J), "The Impacts of Marginal Status for Women Soldiers in the Israeli Military"

クレシ　サラ好美（慶應義塾大学 J）「日本に暮らすムスリム第二世代：当事者の語りから見える葛藤の様相」

野中葉（慶應義塾大学）「在日インドネシア人ムスリムとモスク建設」

第6部会（ハイフレックス：対面とオンライン）

中村友紀（筑波大学 J）「西岸地区における紛争がパレスチナ人農家の営農に及ぼす影響の定量的分析」

鶴見太郎（東京大学）「記憶の持ち越し：シオニズムにおける東欧でのポグロムとパレスチナでの暴力」

岡真理（京都大学）「中東現代文学におけるワタンと郷愁」

千葉悠志（公立小松大学）「中東諸国における情報部門の民営化とその政治的意味：エジプトの事例を中心に」

岡室美恵子（星城大学）・染矢将和（名古屋大学）「COVID-19 のエジプト経済への影響」

第7部会（ハイフレックス：対面とオンライン）

濱田聖子（東京大学）「ジャーヒズにおける自然・理性・意志・選択：倫理的作品への応用」

中野さやか（早稲田大学）「タバリーの美しくつなげられた歴史：アブドルマリク・ブン・サーリフの伝記の比較を中心に」

荒井悠太（早稲田大学）「「民族史」としての『イバルの書』：前近代アラビア語史書への構造的分析」

池端蕗子（立命館大学）「急速に変容する現代社会とイスラーム : 集団的イジュティハードによる法解釈の展開」
竹村和朗（高千穂大学）「「離婚」裁判所の行方 : エジプトの 2021 年身分法改正論議から」
早矢仕悠太（東京大学 J）「マーリク派法学における死地観念の形成と都市／村落空間の法規定」
後藤絵美（東京外国語大学）「クルアーンとジェンダー平等 : ナスル・ハーミド・アブー＝ザイドの議論の論理と可能性」

【公開講演会報告】

日本中東学会第 38 回公開講演会は、レバノン出身の仏ゴンクール賞作家で中東の現実に根差した文明論を近年発表しているアミン・マアルーフ氏を迎え、オンラインで開催された。パリ在住の氏の時差を考慮し 17 時という遅い開始となったが、参加者は 250 名以上を数えた。最初に司会の大稔哲也会員より、マアルーフ氏の経歴・著作と、人々の移動と邂逅、マイノリティへの顧慮といった氏の作品の特徴が紹介された。

今回の講演会は、マアルーフ作品の翻訳者でもある芥川賞作家、小野正嗣氏（早稲田大学）の問い及び岡真理会員と黒木英充会員のコメントに対しマアルーフ氏が返答する形で行われた。

小野氏からは、自分の集団と他との差異が強く規定・細分化され複数のアイデンティティの一つを「正当」とせざるを得ない現況に対する心境と、現況で人間の感情形成に資してきた芸術・文学にいかなる可能性があると思うかが問われた。マアルーフ氏は自己と他者の複雑さ、さらに他者と繋がる部分を認めなければ社会が成立しないとの意見を述べ、芸術・文学・テクノロジーの未来を考えるうえで、西洋文明と他の文明の関連性の枠内でアイデンティティを模索することは死活に関わる問題であるが、それがまだ解決していないと答えた。

岡真理会員からはマアルーフ氏と現代世界におけるワタン（祖国）とは何かとの問いが寄せられ、マアルーフ氏は人間の移動や国の転変によって「祖国」が揺れ動く現況を指摘しながら、それでも個々の「祖国」認識は受け入れられるべきとの見解を示した。黒木英充会員は移民と受入社会の関係についての見解を問い、マアルーフ氏は双方の信頼性の欠如により、相違に対する寛容性が後退している状況を遺憾の念を示しつつ挙げた。

質問内容はフロアからも含めさらに多岐に渡ったが、マアルーフ氏は終始熱意を込めて応じ、盛況のうちに会は締めくくられた。

（柳谷あゆみ　大会実行委員）

【研究発表会場から】

企画セッション 1：“Gender, social change, and politics in the Arab states of the Gulf”

The panel investigated the changes that are occurring in the Arab Gulf states and especially how new gender roles, dynamics, and priorities are being formed, shaped, and negotiated, and the

ways that these changes intersect with other dynamics in the region.

The session was opened by Prof. Baabood, who introduced the speakers and set the scene for the discussion.

The first speaker, Dr. Tsujigami, examined the roles of women as entrepreneurs and consumers in the political economy of Saudi Arabia. Drawing on case studies from fieldwork, she showed how Saudi women are carving unique spaces as entrepreneurs, and in so doing, renegotiating traditional roles, finding new public spaces in which to operate, and encouraging new forms of women-led consumption. The growing formalization of such dynamics suggests, she argued, both a new manifestation of female agency and the possibility for gender roles to be further renegotiated in future.

Dr. Goto then spoke and examined the changing nature of the abaya, the black cloak outer garment worn by women in the Gulf Arab states, demonstrating how the styles, purposes, and meanings of the abaya are changing. She examined the emergence of new abaya, and new women-run businesses making and selling them, and the roles of both prominent women and social media in leading these changes. Her speech, drawing on interviews conducted with Gulf women, illustrated how social change in the region has fed changes in the abaya, and examined some of the implications of this for women's roles in Gulf societies.

The third presentation by Dr. Sim, delivered by Prof. Gray due to Dr. Sim being ill, examined female education in the Gulf and the rise of women as tertiary students in recent decades. The presentation showed how women now outnumber men in virtually all fields and levels in the region, with Qatar as a case study, and assessed some of the implications of this, including the fact that Qatari men and women often study different subjects and at different levels – which may be one of the reasons why women remain less represented in the workforce than might be expected given their sheer numbers as students.

Prof. Gray then wrapped up the presentations and added some additional thoughts, before opening the floor to an engaging set of questions.

(Matthew Gray)

企画セッション 2：「社会変容と儀礼の再構成：現代イランの追悼儀礼から」

シーア派の歴代イマームの死を悼む儀礼は、時代ごとに異なる実践と、それに対する宗教界と国家の言説により、＜宗教＞と結びついたり切り離されたりしてきた。本セッションでは、20 世紀後半以降のイランで追悼儀礼をめぐる実践と言説がどのように変化してきたのかを検討した。

黒田賢治会員（国立民族学博物館）は、近年のイランで刊行された追悼儀礼に関するドキュメンタリー作品批評集を手掛かりに、同書で扱われた作品が必ずしも国家が企図する儀礼の枠組みにおさまらないこと、また国家やシーア派といった枠組みを超えて儀礼が照射するモダニティを捉える意義が示されていることを指摘しながら、同時代の人々の営みを映し出す普遍的な題材として追悼儀礼が扱われるようになったことを論じた。

椿原（龍谷大学）の報告では、革命前後のフィクション映画における追悼儀礼の描写が扱われ、革命前には儀礼が社会的抑圧や不正への異議申し立てを表現するのに用いられてきたが、革命後の社会における儀礼の隆盛が映画の演出上の効果を減じさせたためにこうした描写が減少したと指摘した。他方で、近年ではカルバラーの物語を題材に用いる作品が現れ、伝統文化から宗教文化へと追悼儀礼の位置付けが変容したことを明らかにした。

谷憲一会員（上智大学アジア文化研究所）は、革命後のイランで実践される追悼儀礼の多様性に焦点を当て、国家や宗教権威がどのような論理で異なる形態の儀礼を包摂・黙認・排除してきたのかを概観した上で、公的な場所から排除された自傷儀礼を行う当事者には実践を正当化する語りが見られないことを指摘し、追悼儀礼は言説による制限を超えて様々な形で実践されるがゆえに国家のイデオロギー装置には必ずしもなり得ないことを論じた。

山岸智子会員（明治大学）からは、イランを越えたシーア派諸社会のなかに追悼儀礼を位置づけ、個々の事例を考察するためのコンテクスト・時や場所の相違やその幅に留意する必要性を指摘したうえで、19 世紀から続く殉教譚の具象化・図像化という流れが 21 世紀に入って加速し、儀礼の中心が語りから視覚的なイメージやリズム重視へと変容したことで、娯楽に近づいたと見ることができるとのコメントがなされた。

（椿原敦子）

第 1 部会

The first paper of the session was presented by Dr Nicholas Mangialardi of Williams College, attended by twelve people. This paper looked at perceptions of Japan in Arabic literature from across the twentieth century via the medium of sound. Numerous ways in which the soundscape of Japan was recorded in Arabic texts is reported, such as the sound of traditional Japanese wooden sandals on the road, the resonance of the Japanese language, and the surprise at the ringing of some of the earliest mobile phones are recorded. In so doing, the paper opened up a new arena on Middle Eastern travellers' perspectives on Japan and provided a more detailed understanding of which aspects of Japanese society and culture they wished to present to their audience.

The second paper, attended by six people, was by Dana al-Nafouri, a second-year PhD student at Tsukuba university, who presented a number of wall paintings from ancient Syria. In this, a number of different surviving wall paintings from archaeological sites across the Middle East were presented, and their form, context, and mode of production explained. The paper thus allowed the audience insight into the political legitimisation strategies that these painting helped develop and foster in the pre-Islamic period.

(Alex Mallett)

兼定愛会員（同志社大学）の発表の主題は、クルアーン中に同語根の語彙が度々現れるものの先行研究では特化した考察がおこなわれてこなかった「フズン（悲しみ）」

という語の解釈史である。兼定会員はスンナ派啓典解釈書（タフスィール）間に大きな相違が見られないことを指摘した上で、スンナ派の伝統的解釈ではフズンは宗教的禁忌の対象ではなくフズンの回避よりもその際の意思と行動が重視されていると結論づけた。この発表に対しては、啓典解釈書の選定基準に関する質問があり、スーフィズム系の解釈書をも取り入れるべきではないかとの指摘もなされた。

アルモーメン・アブドーラ会員（東海大学）は、雌牛章をサンプルとして 3 冊のクルアーン日本語訳を比較することで、アラビア語の原書にある宗教用語を和訳する際の翻訳ストラテジー採用の有無や採用されているストラテジーの種類について分析した。その結果、3 冊のクルアーン和訳はすべて翻訳ストラテジーを設定しているものの様々な違いがあることが明らかにされ、翻訳ストラテジーの選択と応用に関わる言語的アプローチの重要性が指摘された。質疑では翻訳アプローチとストラテジーの相違点などが話題となった。

（菊地達也）

竹田敏之会員（立命館大学）は、アラブ韻律学の成立過程や近代的展開を概観したうえで、20 世紀半ばにエジプトのイブラーヒーム・アニースが提唱した韻律学の改革案を紹介した。文法学の改革に比して注目されることは少ないものの、韻律学でも近代以降、伝統理論の見直しや簡素化は試みられてきた。アニースは両分野にまたがって改革を試みた学者であり、こうした事例はアラブ世界の言語文化全般における伝統と近代の問題を考えるうえで興味深い。質疑応答では、現代アラブ世界における詩の隆盛や、韻律学改革に対するアラビア語アカデミーの関与の有無などが話題に上った。

榮谷温子会員（慶應義塾大学）は、アラビア語文法学の「種（jins）」概念と「一般（√ʿ-m-m）」概念の成立過程を、主要な文法家の著作を引用しながら整理した。文法学史上における両概念の確立時期は一致しており、それらが関連した現象であったことを示唆しつつも、前者の遅れが後者の遅れの原因となったとまでは言い切れない、という結論であった。発表では「種を表す固有名詞」などアラビア語文法学における独特の範疇も詳しく扱われ、それらをめぐって質疑応答が行われた。

村上武則会員（東京外国語大学）は、「クルド人」による「クルド語」定義の拡大や出版物の（国境や方言圏を超える）流通の拡大など、近年のクルディスタン情勢を受けて、「クルド文学史」の範囲自体が時間（歴史）的にも空間・言語的にも拡大・複雑化しつつあることを豊富な例を挙げつつ指摘した。民族的アイデンティティやナショナリズムの変容と文学史編纂の関係という観点から興味深い事例であり、個別の点に関して活発な質疑応答がなされた。

（福田義昭）

第 2 部会

井堂有子会員（日本国際問題研究所）の発表は、エジプトが隣国スーダンを舞台に展開する農業生産事業の意義を明らかにすることを目指した。近年生じたエジプトの食糧政策の変化（自給率の向上を含めた小麦の供給源の多角化）、両国間の農業投資を

めぐる動き、スーダン農業に対する海外からの投資熱の高まりなどを紹介・検討し、当該事業には食糧の安定供給を目指すエジプトの意図が反映されていると同時に、投機的なアグリビジネスとしての側面があることを指摘した。他方、スーダン側には農産物輸出を通じた経済発展が期待されるものの、他国の土地における食糧生産による利益追求には倫理的課題があるとも指摘した。

柳沢崇文会員（日本エネルギー経済研究所）の発表は、近年脱炭素化の取り組みを進める GCC 諸国がどのような方法を用いてその実現を図ろうとしているのか検討することにより、脱炭素化に取り組む目的を明らかにすることを目指した。各国が示すヴィジョン（将来構想）、温室効果ガス削減目標（NDC）、石油・ガスの国際需要の見通しに加え、各国の脱炭素化に向けた国際枠組への参加の経緯、再生エネルギー・水素プロジェクトを紹介・検討し、GCC 諸国の脱炭素化は地球環境保護よりも自国経済の持続的成長を目的とする側面が強く、国際的な脱炭素化の潮流を利用しながらさらなる進展も予想されると結論付けた。

（勝沼聡）

ハディ　ハーニ会員（東京理科大学）による「アブラハム合意における権力と抑圧：批判的ディスコース分析の観点から」は、2020 年 9 月 15 日にアメリカの仲介で調印された「アブラハム合意」に関して批判的言説分析を試みた論理的、意欲的報告である。同合意は、合意を結んだイスラエル、アラブ首長国連邦およびバーレーン国家間の平和的関係性を強調し、合意内容を正当化することによって、同合意への反対意見に対して否定的印象を想起させることに成功しており、パレスチナ側の視点はほとんど取り入れられていないと結論づけた。

岡野内正会員（法政大学）は、題目を「ジェンダー難民による武装革命―ロジャヴァ革命」と修正。クルド系住民が多数を占めるシリア北部地域を 2012 年 7 月以降実行支配する住民自治政府が成立した「ロジャヴァ革命」とは、トルコ支配下のクルド社会のジェンダー秩序から逃れた男女の「ジェンダー難民」を主力とする勢力が、内戦下で軍事的真空状態となった同地域住民とともに武装蜂起後、男女別軍事警察組織創設や行政組織に男女の代表設置など、同地域に新たなジェンダー秩序を創出した「武装ジェンダー革命」であったという仮説を提唱した。

（江川ひかり）

酒井啓子会員（千葉大学）は、2021 年 10 月イラクで実施され、サドル派を始めとするシーア派政党連合が最大勢力の座を維持した選挙を事例に、首都バグダードにおける選挙区の分析から、宗派が政治アイデンティティとして固定されているか否かを論じた。1950 年代までの旧市街や 50 年代以降の商業地、新市街の存在、南部移民所得層や軍・政府関係者などで棲み分けのされてきたバグダードの変容が示され、地域特性が明らかにされた。また、サドル潮流の地盤であるサドルシティ外にも党勢は拡大しつつあるものの、「地域政党」の域を超えないものであることが示された。

小林周会員（リビア大使館）は、2021 年 12 月に予定されていながら投票予定日の

2 日前に延期されたリビアの大統領・議会選挙ついて、選挙プロセス及び延期された背景についての分析を報告した。リビアでは「アラブの春」以降「断片化」が生じているとした上で、東部・南西部を実効支配する軍事組織との間で停戦合意がなされ、統一政府が樹立した後も、選挙プロセスを進める主体はスボイラー化したことが指摘された。暴力の拡散も見られており、選挙の延期がもたらす余波についても示唆が提示された。

（佐藤麻理絵）

第3部会

松田和憲会員（京都大学）の発表は、南アジアのウラマーの派閥（Maslak）の系統を分類した上で、バレールヴィー派ウラマーの展開する、カーディリーの解放を目指す「ラッバイク運動」の概況が整理された。質疑応答では、冒涜法の歴史や、ラッバイク運動の支持者層とバレールヴィー派の過激派の重なりなどについて質問が寄せられた。

岩倉洸会員（京都大学）の発表は、旧ソ連地域において国家が宗教を管理する体制が取られており、近年の法改正で国家による宗教管理がさらに強化された経緯が示された。この発表対し、ソ連時代に養成された宗教指導者の立ち位置や、「宗教的寛容」概念の歴史的淵源、海外の宗教指導者へのアクセスの可否、アゼルバイジャンの「官製」イスラームの指導者層など、多くの質問が寄せられ、時間いっぱい議論が交わされた。

（須永恵美子）

黒田彩加会員（立命館大学）は改革派ムスリム知識人として知られるハーリド・アブルファドルの政治思想の分析をおこなった。まずその経歴や思想的系譜を概観したうえで、特にサラフィー主義者やイスラーム主義者の主張と対比させながら、民主主義、近代、シャリーアに関する彼の議論を考察する発表であった。質疑応答では、エジプトでの評価、スンナ派思想における位置づけ、ソルーシュなど他の改革思想家への彼の評価、アメリカでの思想的影響、彼の倫理・道徳観など様々な論点から活発な議論がなされた。

桐原翠会員（日本学術振興会）は、これまでのハラール食品産業研究の成果を踏まえつつ、各イスラーム法学派におけるハラール規定の比較分析から、ハラールの意味や定義を論じた。まず前半で、先行研究や一般のムスリムの言説などにおけるハラールの定義をまとめたうえで、後半では食肉に関する細目に注目しながら、法学派ごとの規定の相違が分析された。結論としては、基本的に典拠は同じであり、解釈が部分的に異なる程度で、全体的には法学派の間で大きな違いがないことが確認された。質疑応答では、地域ごとの多様性についても考慮する必要があるとの指摘がなされた。

（高橋圭）

足立真理会員（日本学術振興会）は、急速に規模を拡大しているザカートのオンラ

イン化に着目し、東南アジア最大の決済アプリ GO-PAY とインドネシア全国ザカート管理局とが協働して始めたザカートのオンラインサービスについて、その課題を検討した。ザカートの徴収面においてはデジタル化が積極的に推進されているが、分配面ではほとんど活用されていないという課題や、近代的な制度化やデジタル化に伴い、ザカートは貧者の正当な取り分であるというクルアーンの理念から離れ、生産的人間に育てるという新たな理念によって再構築されているのではないかといった、興味深い考察が提示された。エンパワメントやトレーニングのための富の再分配の一つの手段として、国家がザカートのオンライン化を主導している点を、「新自由主義的」と評すことの妥当性などについて、議論が交わされた。

小島宏会員（早稲田大学）は、英国の 18～39 歳のムスリム男女を対象に、コロナ禍での宗教実践と健康状態との関連について、ウェブを通じてアンケート調査した結果を報告した。宗教関連要因の健康に対する影響については、これまでにムスリムを対象とした量的調査は行われていなかったとのことで、宗教性が強い人ほど肉体的・精神的健康状態や、生活満足度が高くないなど、直観に反する興味深いデータが紹介されたが、より詳細な分析については今後の報告が待たれる。

（山本薫）

第 4 部会

望月葵会員（立命館大学）は、コロナ禍によって移民・難民の送り出し/受け入れが鈍化し、誰を受け入れるのかという境界が再定義されているとした上で、彼らが入国時の選別だけでなく、その後もコロナ禍による失業や健康問題、孤立、宗教的摩擦といったリスクに晒されていることを明らかにした。他方で庇護申請手続きの簡略化、多言語でのコロナ関連情報の提供といった行政の取り組みだけでなく、感染予防の啓蒙やコロナ対策接種会場としてのモスクの有効利用など、既存のムスリムコミュニティの文化的基盤が機能しているドイツの事例が紹介された。これに対し、入国時のワクチン接種証明による選別が新たな分断につながる可能性について質疑がなされた。

鈴木慶孝会員（日本学術振興会）は、流入先のトルコにおいて「難民」でもなく一時的保護の対象でもない「条件付き難民」であるアフガン人が直面している労働、住居、医療、教育の問題を論じた。さらに、国籍取得もトルコのナショナル・アイデンティティを脅かさない、「管理可能な文化」をもつトルコ系アフガン人に限定されていることから、トルコの多文化性のあり方に疑問を呈し、移民に対する、出自にとらわれない安定した地位と権利の付与を提唱した。これを受け、フロアからはトルコ系であることの証明、基準について質疑がなされた。

（大川真由子）

Ziad Alahmad 会員（東京外国語大学）の発表は、2011 年以降にトルコに移動したシリア人がトルコ政府の保護政策をどう理解しているかを、オンライン匿名調査に基づいて考察したものである。中東地域における保護制度の歴史を概観し、報告者はジュネーブ条約加盟国であるトルコ政府の政策の変遷を紹介した。続いて報告者は、2021

年に実施した、トルコ在住のシリア人 400 名弱に対する調査結果を報告した。回答者の属性（教育、年齢、地域、民族）について質問が出され、報告者はそれらに誠実かつ的確に応答した。参加者の関心の高さが示され、研究の更なる深化が期待される、意義深く有益な時間となった。

（近藤洋平）

熊倉和歌子会員（東京外国語大学）の発表は、しばしば遊牧と結びつけられ、水利社会の敵対者と見られてきた、マムルーク朝時代エジプトの「ウルバーン」の実態およびマムルーク朝政権との関係について 14 世紀を中心に再検討したものであった。それに対して、上エジプトと下エジプトの間でウルバーンの性格や政府の対応に違いが見られるか、エジプトの地方は部族社会と考えてよいのか、そしてそれは今でもそうなのか、14 世紀前半の状況はその後、オスマン朝支配時代になるまでの間に大きく変わったのではないかといった質問が出された。

小澤一郎会員（立命館大学）は、現在のイラン・パキスタンの沿岸部に広がるマクラーンにおける現地のバルーチ人社会と、19 世紀末から 20 世紀初頭までの間に同地で武器交易活動を展開したアフガン人、そしてそれを禁圧しようとしたイギリス帝国との関わり合いについて論じた。この発表に対して、バルーチ人が取り扱った奴隷とはどのような人々だったのか、マクラーンへの武器の輸入先であるマスカトにはどこから武器が送られてきていたのか、交易品に絨毯は見られるか、イラン側の史料にはどのようなものがあるかといった質問が出された。

（伊藤隆郎）

篠田知暁会員（東京外国語大学）による発表は二つの主題を持つものであった。一つは、デジタル・ヒューマニティーズの手法により様々な時期の人的結合を地図上に可視化することを通じ、15～16 世紀のグマーラ地方（モロッコ北部）における知識人ネットワークがどのような外部的・内部的結合の集積として形成されたのかを考察することであった。もう一つは、人名辞典史料から抽出した情報を無料ツール Palladio によって可視化した作業それ自体の長短や課題を示し、それを議論することであった。篠田氏の率直な語り口にも喚起され、両方の主題について実のある質疑が行われた。

（森本一夫）

<u>第 5 部会</u>

Mr. Yuki Sawaguchi's (the University of Tokyo) presentation was dedicated to an analysis of the status of Israeli female soldiers in the military apparatus and their views on gender issues, especially through their military service experience. Several literature reviews and individual interviews showed that several women exhibited their internalization of gender-based assumptions, such as the physical weakness of women, and labeling female combat soldiers as "lesbians." However, as the presenter stressed, their agency is also obvious even in their marginalized status within the army. Several questions and comments were raised, including the

assumption that the view of the female status as “marginal” might be excess, that certain environments, especially when counterparts reply to a foreign male researcher (presenter), would affect their narratives on agency, and that an analytic approach would be desirable, rather than a descriptive perspective.

(Hiroyuki Suzuki)

クレシ・サラ好美会員（慶應義塾大学 J）の報告では、ムスリムの第二世代について、第一世代であり研究者である発表者が行った聞き取り調査の結果が報告された。第二世代のイスラームに対するスタンスは様々であることが説得力をもって示された。ムスリムの参加者もおり、当事者と研究者のボーダーレス化が印象的であった。

野中葉会員（慶應義塾大学）の報告では、モスク建設をめぐる在日インドネシア人の活動についての調査の途中経過が報告された。発表者がオンライン参加に切り替えて会場に現れず、会場スタッフが慌てるという一幕もあった。全体として、ハイフレックスではあったが活発な質疑応答が交わされていた。

予定されていた一部の発表が当日に中止になり、発表を楽しみにしていた学生が落胆していた。本大会はコロナ禍のハイフレックス開催であり、大変運営側の負担が大きいことは一参加者からも見て取れた。大会運営側の尽力のみならず、発表者、参加者の様々な形での協力が、円滑な学会運営には欠かせないことを実感した。

（嶺崎寛子）

第 6 部会

中村友紀会員（筑波大学）による報告は、ヨルダン川西岸地区で続く分離壁および入植地の建設が、パレスチナ人農家の営農や日常生活に与える影響についての定量的分析で、2010 年のパレスチナ中央統計局による農業センサスと、GIS 情報、現地調査を併用することで、一般的に指摘される占領問題の農業への影響の実相を具体的に描き出した。報告では分離壁・入植地建設の概況、西岸地区の農業生態区分や、水源問題等を確認したうえで、紛争が西岸地区の農業に及ぼす影響について、11 点の類型を示した。本報告はさらに紛争の影響について、同様の自然環境であるイスラエルやヨルダンの農業との比較や、定量的分析による客観的な指標を用いて評価した点に特徴がある。その結果、分離壁建設による農地アクセス時間の減少に伴い、改良品種の導入が促進されたことや、農業労働者と機械の利用が減少したことなどが明らかにされた。

鶴見太郎会員（東京大学）による報告では、イスラエル建国期にシオニストによる、ポグロムとパレスチナ人による暴力（抵抗運動）の捉え方が、史料に基づき比較された。ロシア語とヘブライ語の新聞・雑誌の記録をもとに、シオニストの視点を検証し、全く異なる性質の動きである両者が、類似した反ユダヤ運動として記憶され、パレスチナ人によるシオニストへの反発もまた「ポグロム」と呼ばれる傾向にあったことが指摘された。とはいえポグロムが逃れるべき迫害であったのに対して、パレスチナ人との関係は将来的なイスラエル建国への闘争の一環としても捉えられていたという違

いも示した。ポグロムとパレスチナ解放闘争との比較は、中東アラブ研究者からはやや抵抗のある並置であり、ロシア東欧出身のユダヤ人研究を基盤とする本会員ならではの研究視角にもとづくものといえる。

岡真理会員（京都大学）による報告では、自身が代表を務める科研費「トランスナショナル時代の人間と「祖国」の関係性をめぐる人文学的、領域横断的研究」による研究に基づき、その成果のひとつである『中東現代文学選 2021』の内容が紹介された。アラビア語の「ワタン」は、「祖国」とも訳されるが原義では「人間が生を織りなす場」を意味する。本報告では、異郷の地に暮らす作家によるワタンへの郷愁をテーマとした作品を対象として、その叙述分析を通して、ワタンとは何かという大きな問いについて考察を加えた。質疑では、これらの作家が作品を書く際に使用する言語の選択の意味等について質問がなされた。

（錦田愛子）

千葉悠志会員（公立小松大学）の報告は、エジプトを事例に、2011 年革命以後の情報部門の民営化とその政治的意味を明らかにしようとした意欲的な報告であった。本報告ではとくに 2011 年革命後のエジプトにおける民間放送局に注目し、その革命後の変化や 2013 年の軍による政変における役割とその後に強化された権威主義体制との関係が明らかにされた。オンラインと教室のフロアーからは、民間放送局のみに注目することや SNS などについてコメントや質問が寄せられ、参加者とのあいだで活発な議論がなされた。

岡室美恵子会員（星城大学）と染矢将和会員（名古屋大学）による報告は、経済構造改革の途上でコロナ禍という外生要因の影響への対処に迫られる途上国経済の成長の潜在性について分析を試みるため、COVID-19 のエジプト経済への影響をマクロ経済の各指標を用いて検証した。コロナ禍での経済成長を確認するとともに、175 か国のデータを使いエジプトの新型コロナウィルスの影響を推計した結果によれば、実際のエジプト経済では新型コロナウィルスの影響ははるかに軽微であったという。コロナ禍が続くなかで、時宜にかなった発表となった。

（岩崎えり奈）

<u>第 7 部会</u>

濱田聖子会員（東京大学）の発表は、古典アラブ文学の文豪であり、ムウタズィラ派としても知られるジャーヒズ（868 年没）を取り上げ、ジャーヒズの「自然」「理性」「意志」「選択」の概念を確認し、それらが彼のアダブ的作品にいかに反映されているかを分析し、『トルコ人の美徳』や『けちんぼども』などの著名な作品の再解釈を提起した。この発表に対して、ジャーヒズのムウタズィラ派観と、後代の引用や解釈からジャーヒズの見解を導く妥当性について質疑がなされた。

中野さやか会員（早稲田大学）の発表は、アッバース朝の有力者であったアブドルマリク・ブン・サーリフ（812 年没）に関するタバリー（923 年没）の記述を、タバリーより前の世代、および同世代のウラマー・文人の記述と比較し、さらに後代のウラマー

たちの著作も検討することで、タバリーが先人の記事をつなぎ合わせて構成した歴史が、どのように継承・受容されたのかを考察した。そして、この発表が取り上げた10世紀頃から 14 世紀頃にかけてのウラマーによる書物の編纂過程について質疑が交わされた。

荒井悠太会員（早稲田大学）の発表は、その「序説」が注目を集めてきたのに対して、その総体が分析されることの少ないイブン・ハルドゥーン（1406 年没）の『イバルの書』について、そこに述べられている様々な主題と、それらを語る歴史的報告（akhbār）の配列などを分析し、『イバルの書』が、王権の移行プロセスとしての歴史という「序説」のプロットをたどりつつ、系譜学的単位に基づいて階層化された「民族史」であることを明らかにした。この発表に対して、イブン・ハルドゥーンの歴史叙述の独自性に関して質疑がなされた。

（森山央朗）

池端蕗子会員（立命館大学）の報告は、国籍・宗派・学派を超えたウラマーによって実践される「集団的イジュティハード」に着目したもので、国際的な法学者の組織によって「公式のイスラーム」が形成されていることを、ウラマーの組織やそれらによって形成された規範の具体例を挙げながら論じた。会場からは「ウラマー」、「集団的イジュティハード」、「公式のイスラーム」といった概念についての質問が寄せられた。

竹村和朗会員（高千穂大学）の報告は、エジプトで 2021 年に提出されたがその後棚上げになった身分法案を取り上げた。近現代エジプトにおける身分法の歴史的変遷と 2004 年の家庭裁判所の役割を整理しつつ、2021 年身分法案をその文脈の中に位置づけ、身分法案が後見と監護という「父母」役割についての問題提起となったことを論じた。会場からは、家庭裁判所に注目した理由や、保守的サイドからの反応について質問があった。

会場には 10〜15 名の聴衆が参加した。オンラインでも 20 名ほどの参加者があったが、その中に対面参加者も含まれているので、おそらくオンラインの参加者は 15 名前後だったと思われる。ハイブリッド開催は十分に機能しているように感じられた。また、部会終了後に参加者同士で会話がなされるという、学会の日常風景が戻っていた。

（秋葉淳）

早矢仕悠太会員（東京大学 J）の報告は、9 世紀から 14 世紀前半のマーリク派法学のテクストを資料とし、イスラーム法における死地蘇生の法規定の形成過程について明らかにするものであった。誰の権利も付されていない土地である「死地」の開墾についての法規定の形成と、都市や村落空間において共同利用に服する土地や設備について定めた法規定との関係を考察し、土地の所有と利用をめぐる理論的枠組みの提示も試みた。対面の参加者とオンラインでの参加者の双方から、基本用語の定義についての質問や、議論の方向性についてのコメントなどが寄せられた。

第 7 部会を締めくくる後藤絵美会員（東京外国語大学）の報告は、20 世紀のエジプ

トで活動した思想家ナスル・ハーミド・アブー・ザイドをとりあげ、聖典クルアーンの捉え方や読み方を変更することで、ジェンダー平等を実現しようとする動きについて検討した。アブー・ザイドが、その著書『宗教言説批判』(1990) において、クルアーンの言葉の「意味」と「含意」を分け、時代の変化や現実の多様性に応じた理解を可能とする主張を展開したことなどが明快に説明された。フロアからは、そうした新しい聖典解釈に関する質問や、実際のムスリム諸国の家族法に関わるコメントなど、質問時間を超過するほどの熱心な発言が続いた。

(小野仁美)

【第38回年次大会を終えて】

去る5月14日(土)・15日(日)、第38回年次大会が早稲田大学文学部・大学院文学研究科「中東・イスラーム研究コース」主催で行われました。一昨年秋に開催をお引き受けした時点の想定では、開催の頃には新型コロナ感染症もかなり収まっており、一新されたキャンパスに皆様が再会を祝う場を提供できるのではと考えていました。しかし、コロナの状況はあまり好転せず、我々も日々のコロナ報道に一喜一憂しながら、大会運営に当たらざるを得ませんでした。結局、初日の総会と公開講演会はオンライン開催とし、2 日目の研究発表だけは何とか対面形式とオンラインの併用までこぎつけました。最終的には、大会中の感染もなかったようで、つつがなく終えることができました。感染予防対策にご協力くださった皆様に、改めて御礼申し上げます。

まず初日の公開講演会ですが、在仏のアミン・マアルーフ氏(作家)とオンラインでつなぎ、同氏の作品の翻訳者である小野正嗣氏とともに、縦横に語っていただくという趣向でした。構成としては、最初にマアルーフ氏と小野正嗣氏(作家)、筆者の3名で鼎談したのち、岡真理会員(京都大学)、黒木英充会員(東京外国語大学/北海道大学)からコメントを加え、さらに視聴者からの質問にマアルーフ氏が応えるという形を採りました。近年邦訳されたマアルーフ氏の『アイデンティティは人を殺す』(ちくま学芸文庫)は日本でも幅広い読者から好評を博しており、講演会も関係者も含めて全国から400人を超える登録者を得ました。詳細は柳谷あゆみ会員の報告に譲りますが、筆者から問うたのは、アラビア語ではなくフランス語で書くことの含意、そして中東の内/外で書くことの違いや、「歴史」へのこだわりの持つ意義などについてでした。講演会全体としては、日本中東学会を外へ開き、中東研究の側から一般市民へとつなぐことを念頭に置きました。

2 日目の研究発表は、悪天もあってオンライン参加者が146人、対面による参加者が85人(計231人)と分かれました。それでも、対面で参加した方々からは、「やっぱり対面は良いねぇ」「来たかいがあった」「また研究しようという気になった」「テンションが上がった」などと温かい言葉をいただきました。お蔭様で、ハイブリット方式を維持した我々の苦労も報われた気がします。全体の懇親会は行いませんでしたが、その後は小グループに分かれて懇親会が続いたようです。「アラブの春」はオンラインでもその端緒を創り出し得ましたが、その本体はやはり広場や路上を占めた身体を欠いては成らなかったことを改めて想起させられました。

オンラインと対面形式の併用は、運営側の負担を倍増させますが、両方式にメリットがあることも確かです。それでもなお、来春こそは対面中心に設定できる世界となっているよう祈ってやみません。末筆ながら、司会をご担当下さった皆様、事務局・実行委員会とアルバイトの皆様には、通常の大会よりはるかに多くのご苦労をおかけしたことを詫びしますとともに、ご尽力に心より篤く御礼申し上げます。

（大稔哲也　大会実行委員長）

【大会決算】

日本中東学会第38回年次大会決算			
収入の部		支出の部	
大会開催費（学会本会計より）	400,000	ウェブサイト制作費	215,420
大会参加費（231名）	231,000	技術支援・テクニカルコンサルティング代	20,800
		振込手数料	660
		学生アルバイト代	32,000
		口座開設手数料	1,100
		物品費	5,984
		公開講演会謝金	199,000
		海外送金手数料	11,000
		郵送費	520
収入合計	631,000	支出合計	486,484
		学会本会計への返金額	144,516

（五十嵐大介　年次大会事務局長）

『日本中東学会（AJAMES）』編集委員会報告

- 38-1号は、7月中の刊行を目指して編集作業を鋭意進めております。
- 38-2号投稿論文の審査を行っております。投稿いただいた方には7月末頃に審査結果をお知らせいたします。
- 39-1号の投稿締め切りは12月1日です。欧文の特集を含め、皆様の御投稿をお待ち申し上げております。

本誌に関するお問い合わせ先、原稿投稿先は以下のとおりです。

〒108-8345　東京都港区三田2丁目15番45号
慶應義塾大学　研究室棟604B 錦田愛子研究室気付
『日本中東学会年報』編集委員会

E-mail: ajames-editor@james1985.org

（錦田愛子　AJAMES 編集委員長）

『日本中東学会（AJAMES）』バックナンバーの無償配布について

日本中東学会では、この度『日本中東学会年報』（AJAMES）のバックナンバー在庫を整理するため、希望する学会員に無償配布を実施いたします。現在、AJAMES 収録論文については J-Stage で順次無料公開をしておりますが、著者許諾の関係で一部の論文については電子化されていません。なお、残ったバックナンバーについては学会保存分を除き廃棄される予定です。

- 配布対象号：1 巻（創刊号：1986 年）～36 巻 2 号（2020 年）まで。配布リストについては、後日日本中東学会ウェブサイトで公開します。バックナンバーの掲載論文については、J-stage サイト（https://www.jstage.jst.go.jp/browse/ajames/-char/ja）をご覧ください。
- 申込期間：2022 年 8 月 1 日～31 日まで
- 申し込み先：日本中東学会事務局　james@james1985.org　まで、お名前、会員番号、送付先住所、電話番号、希望する巻号情報をご連絡下さい。
- 備考：
  - 配布部数はお一人様、各号 1 冊まで。在庫数に限りがあるため、先着順となります。
  - 転売目的での取得はご遠慮下さい。
  - 送料は学会が負担します。

その他詳細については、学会ウェブサイトをご確認下さい。

（堀拔功二　事務局長）

寄贈図書

【単行本】

ムスタファ・タトゥジュ（著）、ヤマンラール水野美奈子（訳）『愛の言葉：ユヌス・エムレ』アタチュルク文化センター庁、2021 年

【逐次刊行物・ジャーナル・その他】

『季刊アラブ』No.179、日本アラブ協会、2022 年 4 月

Awraq, No.20, Biblioteca Islámica de la AECID, 2022 年

（堀拔功二　事務局長）

会員の異動

【新規会員】

高橋　ひとみ　　立命館大学大学院
上田　聖　　神戸大学
浪内　紫雲　　東京外国語大学大学院総合国際学研究科
森田　健斗　　同志社大学
ELSHARQAWY　ALAA
Cheddadi　Aqil　　慶應義塾大学
岡本　多久実　　中央大学
ババアリ　梓晴　　法政大学
両角　菜々美　　中央大学大学院
宇川　晴　　東京大学
末森　晴賀　　北海道大学

【所属先変更】

鈴木　均　　JETRO アジア経済研究所　新領域研究センター・グローバル研究グループ
三代川　寛子　　東京外国語大学　総合国際学研究院

（堀抜功二　事務局長）

連絡先をご存じないですか

下記の会員の方々は、連絡先が不明なため、学会からのお知らせなどをお届けすることができないでおります。連絡先をご存じの方は、学会事務局までご連絡いただけますよう、ご面倒でもご本人にお伝えいただければ幸いです。

苗村　卓哉　　モハメド　オマル　アブディン　　横田　吉昭
西舘　康平　　後藤　信介　　ファトヒー　モハンマド
林田　花枝　　藤本　悠子　　田嶋　望　　ターリク　フセイン　ハカミー
Abhu-Hajiar　Iyas　Salim　　Abuhajir　Rehab　A

（堀抜功二　事務局長）

日本中東学会メーリングリストの利用についてお願い

日頃からメーリングリストのご利用を頂き、ありがとうございます。ご利用にあたり、再度のご確認をお願いしたい事項が 2 点ございます。

第一に、メーリングリストへの投稿は投稿専用アドレス(ml_haishin@james1985.org)にて受け付けております。日本中東学会事務局アドレスでは承ることができませんので、ご了承ください。

第二に、配信された ML にそのまま返信しても、投稿者には届きません。投稿者に返信する際は、必ず本文中の連絡先へ連絡を入れてください。

その他、メーリングリストの運用に関する詳細は日本中東学会 HP の「学会について」＞「日本中東学会メーリングリストについて」よりご覧いただけます（http://www.james1985.org/modules/about/index.php?content_id=7）。

（堀抜功二　事務局長）

事務局より

今年 5 月、緑の眩しい季節に早稲田大学で日本中東学会第 38 回年次大会が開催されました。研究仲間と直接顔を合わせ、同じ会場で報告を聞き、議論に参加することの楽しさを改めて確認する機会となりました。新型コロナウイルスの感染が落ち着いた時期だったとは言え、開催校である早稲田大学と実行委員の皆さまのご尽力により、大会が無事に実施できました。関係者の皆さまにはこの場を借りて御礼申し上げます。

（堀抜功二　事務局長）

日本中東学会ニューズレター　第 167 号
発行日　2022 年 7 月 31 日
発行所　日本中東学会事務局

日本中東学会事務局
〒104-0054
東京都中央区勝どき 1-13-1　イヌイビル・カチドキ 10 階
（一財）日本エネルギー経済研究所　中東研究センター内
E-mail: james@james1985.org
http://www.james1985.org/
郵便振替口座：00140-0-161096（日本中東学会）
ゆうちょ銀行口座：〇一九店（当）0161096
（ニホンチュウトウガクカイ）